

武士道における「忠」概念の再解説
—『勸進帳』の武蔵坊弁慶を例に—

A Re-interpretation of Chū in Bushidō: Taking Musashibō Benkei
in Kanjinchō as an Example

張 懿

Zhang Yi

湖南涉外经济学院, 図書館

Library, Hunan International Economics University

Corresponding Author:

Yi Zhang

Library, Hunan International Economics University

303 (Academic Report Room), Fenglin sanlu 822, Yuelu, Changsha 410204, China

E-mail: scholarzhangyi@163.com

Received: October 2, 2024

Revised: March 3, 2025

Accepted: March 18, 2025

武士道における「忠」概念の再解釈 —『勸進帳』の武蔵坊弁慶を例に—

要旨

「勸進帳」は歌舞伎の名作であり、その主人公である武蔵坊弁慶の人物像は、広範な文化的影響を及ぼしている。この論文では、「勸進帳」の人物像を「武士道」における「忠」の文化テクストとして捉え、その意味を再解釈する試みを行った。この再解釈の過程において、文化批判の一般的な手法に加えて、歴史的背景の検討と学際的な研究手法を組み合わせた。最終的な結論として、「武士道」における「忠」は、主君との「情」を基にして、主君の意志に対する実践として再解釈される。この「忠」は、合法性と道徳的価値を持ち、戦う性質を有する。また、武士はこの「忠」を実行するためには、「勇」と「智」という品質を備える必要があると示された。この研究は、「武士道」の理念を新たな視点から捉え直し、その深層的な意味を探究する意義を持つ。また、武士道における「忠」の概念が、現代社会においても引き継がれる価値があることを示唆している。

【キーワード】： 武士道, 忠, 勸進帳, 武蔵坊弁慶, 文化批評

A Re-interpretation of Chū in Bushidō: Taking Musashibō Benkei in Kanjinchō as an Example

Abstract

The Kanjinchō is a masterpiece of Kabuki, and the character image of its protagonist, Musashibō Benkei, has a wide cultural influence. This article attempts to reinterpret the meaning of the character images in Kanjinchō as the cultural text of chū in Bushidō. In this process of reinterpretation, in addition to the general approach of cultural criticism, it also combines exploration of historical background and interdisciplinary research techniques. The final conclusion is that chū in Bushidō is based on the “emotion” with the ruler and reinterpreted as the practice of the ruler’s will. This kind of loyalty has legitimacy and moral value, and has a combat nature. In addition, in order to practice this loyalty, warriors need to possess qualities of bravery and intelligence. This study has the significance of recapturing the concept of Bushidō from a new perspective and exploring its deeper significance. Meanwhile, the concept of chū in Bushidō implies that it also has inherited value in modern society.

Keywords: Bushidō, Chū, Kanjinchō, Musashibō Benkei, cultural criticism

1. 動機・背景

武士道の精神は、日本の歴史と文化において非常に重要な位置を占めている。その理解において、特に「忠」という概念の意味を深く掘り下げる必要がある。戴（2011）の研究によると、「忠」は武士道精神の中心であり、「武士道は忠の宗教である」と述べられている。この深遠な文化の精神は、歌舞伎狂言を含め、芸術的なテキストとその表現、意味に通して反映されている。

歌舞伎狂言『勧進帳』は、完全かつ成熟した「安宅伝説」を含み、「義経伝説」の一部としても知られている。この歌舞伎は、並木五瓶によって作られ、天保11年（西暦1840年）、河原崎座で5代目市川海老蔵が初演した。島津（2001a）の研究では、義経伝説の論理的基礎が武士道精神とされる。伝統的な「義経伝説」の検討において、三浦（2000）、黒板（1914）、島津（1933）、前川（2004）らは、源義経を中心に行っている。しかし、源義経自身が武士道の精神を完全に体現したものではなかったという点に注意が払われている。

また、「弁慶伝説」を通じて、また、その主人公である武蔵坊弁慶は源義経の僧兵として描かれている。弁慶は、歌舞伎における武士道精神を反映し、象徴的なシンボルとして位置づけられ、「忠」という概念を理想的な形で解釈する例として機能している。このように、『勧進帳』は、武士道の精神を多角的に捉え、その深い意味を芸術作品として表現している。

現在の「武士道」に関する認識は、主に明治時代以降の民族叙事によって形成されている。特に、Nitobe（2012）の記述はその代表的な例である。実際、「武士道」における「忠」は、多角的で複雑な概念として捉えられるべきである。『勧進帳』における、特に武蔵坊弁慶の人物像分析は、現在の「武士道は前現代文学ではあまり立証されていない」（Sharf, 1995）という一般的な見方を根本的に変えることができる。この分析は、歌舞伎狂言における「武士道」の精神を再評価し、その多面性を明らかにする重要な役割を果たしている。本研究は、『勧進帳』のシナリオを並木（2001; 2023）のバージョンに焦点を当てたものである。この研究では、歴史背景の考察と文化比較などの多角的な方法を組み合わせて、テキストの内容とその中に反映された情報を精緻に分析し、「忠」の意味を再解釈するという取り組みを行った。研究の最後に、本論文が参照した「勧進帳」をはじめとする日本古典の例文を列挙する。この方法論的なアプローチにより、研究は「武士道」の概念をより深く、そしてより多面的に捉えることができる。

2. 先行研究

2.1 武士道における「忠」の概念の理解

先の検討では、武士道における様々な倫理的概念が指摘されていた。武士道は、武士の理想像として、道徳、社会秩序、社会機能の集約として捉えられ、最高の理想、荣誉、英雄主義を象徴している（Braunstein, 2005）。武士道の変化性を考慮すると、江戸時代の武士道は神道に基づく倫理理論として位置づけられていた（Coldren, 2013; 戴, 2011, pp. 14-15）。つまり、『勧進帳』の歴史的背景において、武士道は集団主義の美德を備えた理想的な人格として多く見なされていた。Hurst（1990）は、このような理想的な人格を「忠」とそれに関連する6つのカテゴリー「義」「勇」「仁」「礼」「誠」「名誉」に分類した。付（2008）の研究から見ると、「忠」と「義」は意味的には類似しているが、使用される文脈において異なる範疇として機能する。武士道に関する検討により、武士道の範疇の深い理解が発展してきた。

明治以前の武士道において、最も重要な倫理的範疇として「忠」の解釈は多様である。最も代表的な理解は、Tsunetomo（1981）の思想に由来し、武士を主君の意志を穏やかな気持ちで実行する殺戮マシンとして描写し、その誇りを持つことを強調している。一方で、Ansart（2007）からは、武士道における「忠」がより高い価値観を示す可能性があるという理解がある。彼の見解では、「忠」は、いかなる試練にも耐える関係を構築し、単なる忠誠や服従ではなく、双方向の約束と信頼のもとで自己義務に責任を負う、高尚な品質とされる。この解釈は、「忠」を単一概念ではなく、深い相互性と責任の絆を含むものと捉え、武士道の精神をより多面的に理解する鍵を提供している。

先行研究を通じて、「忠」という概念の理解は、単なるその概念自体の理解だけでなく、武士道の全体像や他の武士道の範疇への理解にも大きく寄与することが明らかになった。また、解釈は複雑で多様であるが、基本的には「武士気質」をその核心とするという点が一致している。このように、「忠」は武士道の精神を象徴する重要な要素であり、その多角的な理解は武士道の深い洞察を提供する。

2.2 『勸進帳』における武蔵坊弁慶の人物像分析

伝統的な研究においては、武蔵坊弁慶のイメージ形成過程に焦点を当てた研究が多く、最終的には日本の文化や民族の潜在意識に関連する研究へと結びつけられている。Игоревна (2020) は、『義経物語』に関する研究を通じて、武蔵坊弁慶のイメージを完全性を持ち、文化的意味を象徴する重要な人物として「義経伝説」全体に位置づけている。また、鳥居 (2022) の「武蔵坊弁慶の由来」に関する研究も注目し値する。この研究は伝説形成の過程を心理学的な観点から分析し、民族の潜在意識による産物として解釈を試みている。これらの研究は『勸進帳』に直接関連しているわけではないが、武蔵坊弁慶のイメージとその文化的な意義について示唆を提供している。これらの成果は、弁慶のキャラクターをより深く理解し、その象徴的な役割を明確にする上で貴重である。

『勸進帳』における武蔵坊弁慶に関する研究も、類似の研究経路をたどっている。島津 (2001 a; 2001 b) は、『勸進帳』を能楽『安宅』の思想の活力と演劇化の改編として捉え、その中の武蔵坊弁慶を道徳理想的な象徴と位置づけている。この「道徳的理想」は、武士道と関連付けることができる。また、藤原 (2000; 2001) も武蔵坊弁慶の人物像を、日本人の心性史における研究材料と評価している。この研究は、弁慶のキャラクターが日本文化における特定の心性や価値観を反映していると見做しており、その象徴的な意義を探究している。これらの研究は、弁慶のキャラクターを通じて、日本の文化と心性に関する深い洞察を提供している。

先行研究は、武蔵坊弁慶のイメージを分析し、その深い意味を探究することで、日本の文化、民族の潜在意識、道徳理想、心性史の理解に深く関わっている。これらの研究は、本研究の探索の経路と一致しており、本研究もまた、深い意味の解明を目指している。さらに、本研究では「心性史」の検討をヒントに、歴史的背景を用いた考察を提供している。この歴史的背景は、単に同期の思想に対する考察にとどまらず、弁慶伝説や日本古典、さらには中国古典にも及び、日本の文化が中国の文化からの深い影響を受けていることを踏まえた分析を含む。この多角的なアプローチにより、弁慶のイメージとその象徴的な意義をより深く、そしてより広く捉えることができる。

3. 「忠」の再解説：人物像の直接反映

もし武蔵坊弁慶の人物像を、武士道における「忠」という概念の象徴と捉えるなら、その特徴は武士道の「忠」の内包に密接に対応していると考えられる。

3.1 「忠」の基礎：主君との「情」

『勸進帳』において、弁慶は感情に敏感な人物として描かれている。例えば、例 (1) に示すように、彼は酔っぱらって昔の恋を懐かしむナレーションを通じて、その感情的側面が表現されている。

例 (1) 文章1 文23-1、23-2、23-3、23-4、23-5、23-6、23-7

地 実に実にこれも心得たり人の情の杯を受けて心をとどむとかや。

ト 杯を受け、よろしくあって

地 今は昔の語り草、

地 あら恥ずかしの我が心、一度まみえし女さえ、

地 迷いの道の関越えて今また爰に越えかぬる、

地 人目の関のやるせなや、

地 アア悟られぬこそ浮世なれ。

例 (2) を参照すると、その人物は主君に対する表現にも、深い感情を秘めていることがわかる。この感情は、彼の忠誠心と敬意を反映しており、主従間の絆を象徴的に示している。

例 (2) 文章1 文21-1、21-2、21-3、21-4

弁慶 それ、世は末世に及ぶといえども、日月いまだ地に落ち給わず。御高運、ハハ有難し有難し。計略とは申しながら、正しき主君を打擲、天罰そら恐ろしく、千鈞をも上ぐるそれがし、腕も痺るる如く覚え候。アラ、勿体なや勿体なや。

地 ついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。

地 判官御手を取り給い。

ト 皆々愁いの思入れ、

この観察から、弁慶が「忠」に込めている感情は、実際には主君の品性に対する彼の認めと尊敬に基づいて成り立っていることが理解される（例えば、彼が「正しき主君を打擲」と表現することで明らかに）。そのため、弁慶はこの行為を極めて恐れており、それを「忠」への裏切りと捉えている。

その中で、弁慶は「天罰そら恐ろしく」という表現を用いて、自身のモラルへの恐れを表現している。このように、弁慶の「忠」は単なる服従ではなく、深い尊敬と承認に基づく複雑な感情の絆を示している。『勸進帳』において、武蔵坊弁慶が抱く主君に対する感情は、特に例(3)に示されるような場面で顕著に現れる。この例では、弁慶が主君源義経の命令に従い逮捕されるという結果を通じて、彼の忠誠心と深い感情が物語的に表現されている。

例(3) 文章1 文2-1

仰せの如く、この程も怪しげなる山伏を捕え、梟木(きょうぼく)に掛け並べ置きましてござりまする。

例(4)、すなわち富樫左衛門の記述から、この捕獲行為は非常に残酷で広範囲にわたっていることがわかる。

例(4) 文章1 文1-1

さても頼朝義経御仲(おんなか)不和とならせ給うにより、判官どの主従(しゅうじゅう)、作り山伏となり、陸奥(みちのく)へ御下向あるより、鎌倉殿聞こし召し及ばれ、かく国々に新関(しんせき)を立て、山伏を詮議せよとの厳命により、それがし、この関を相守る。

例(5)では、武蔵坊弁慶が過去に主君を追うことなく逃れた際に遭遇した困難を示している。

例(5) 文章1 文3-1、3-2、3-3

旅の衣は篠懸(すずかけ)の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしおるらん。

時しも頃は如月の、如月の十日の夜、月の都を立ち出でて、

これやこの 行くも帰るも別れては、知るも知らぬも、逢坂(おうさか)の山隠す霞ぞ春はゆかしける、波路はるかに行く船の、海津の浦に着きにけり。

弁慶は、このようなまずしい状況に直面しても、忠誠心に裏切らない選択をした。これは、彼が主君に追従して逃亡する動機が、利益追求ではなく、深い感情に基づくことを明確に示している。

「忠」の基礎となる「情」は、武士自身の孤独感に根ざしているとも見られる。中世から、武士は儒家の社会的模範として定義されてきた。日本は中国のように古典を研究する知識人「士大夫」を選ばず、武士を「武行文道」の前提の下で選んだ(Virginia, 1998, p. 59; 蔣, 2010)。公共倫理の観点からは、武士も模範的な身分として、哲学的思考に関与させられている。『不動智神妙録』に見られる禅宗と武士の融合がその一例であり、武士の文化的な記述における脆弱性もここで顕在化している。ことわざ「花は桜木人は武士」(Buchanan, 1965, p. 119)は、禅宗の「無常」の思想を反映しており、武士の存在の脆弱性と人生における意味追求の必要性を象徴している。このように、武士は自己の脆弱な存在を認識し、存在の価値と実現を求めることで、人生に深い意味を持たせようと努力した。

したがって、これらの武士にとって、主君への忠誠は、主君の品性への敬服と、主君によって実現された価値への感謝の両方を含む「情」であり、本質的に主君との深い絆を表している。主君が武士によって評価されることによって、君臣間の契約が確固たるものとなり、武士がその契約に誠実に尽力する動機を与えられている。「忠」の概念は、中国の儒家経典『左伝』に見られる自己道徳価値の測定に対する感情から始まり、生涯にわたる倫理的契約への服従へと発展した。この発展は、『左伝』の『文公元年』における「忠、徳之正也」(訳文：忠誠は道徳の正直の根本)という考えに端を発している(左, 2006, p. 81)。特に「忠臣蔵」事件が、主君が死んだ後も君臣間の契約が有効であるという、忠誠の最も典型的な表現とされている。この忠誠の転向は、丸山(1992, pp. 13-16)の江戸時代の「忠」概念に関する研究成果によって明らかになり、儒家の価値論からより普遍的な倫理規範への転向を示している。この転向は、武士の忠誠が単なる個人的な感情から、社会的な契約と倫理的責任へと発展したことを意味している。

3.2 「忠」の内包：主君の意志の実践

東アジアにおける「忠」の伝統的な理解は、主に君臣関係における臣下の義務を指している。中国の古典『論語』では、「臣事君以忠」(訳文：臣下は君主に忠実に仕えなければならない)(孔, 2018, p. 38)と定義されており、この考えは日本にまで及んでいる。日本の文献においても、この「忠」の概念は聖徳太子の『十七条憲法』における記述に見られる。そこで「忠」は、主君の命令を実行す

ることと理解され、忠誠心の具体的な表現として捉えられている。このように、日本の「忠」の内包は、主君への忠誠を行動原則とし、その忠誠を行動に移すことが求められている。¹

例 (6) 文章2 文1-2、1-6、1-7

原文：承詔必謹…是以君言臣承，上行下靡。故承詔必慎，不謹自敗 訳文の一例：天皇から詔書を賜ったときは、必ず謹んでそれに従いなさい。そういうわけで、天皇が仰ることに臣下は謹んで従うようにしましょう。上の立場の者(=上級公務員・上司)がこれを実践すれば、下の立場の者(=下級公務員・部下)もこれに倣うものです。したがって、天皇から詔書を賜ったときは、必ず謹んでこれに従いなさい。謹んでこれに従わなければ、自然と国は滅んでいくことになるでしょう。

しかし、武士道の内包は、『十七条憲法』に記載された内容以上のものを明確に示している。聖徳太子の憲法は、武士道の内容を構成する要素の一部に過ぎず、以下のような多面的な要素も含むべきであることを示唆している。

例 (7) 文章2 文2-6

原文：其如此人，皆无忠於君，无仁於民，是大亂之本也。

訳文の一例：このような人はみんな君主に対して忠義の心はなく、国民に対して思いやりの心を持つことはありません。これは国家の大きな乱れのもとになります。

例 (8) 文章2 文3-3、3-4、3-5

原文：國非二君，民無兩主。率土兆民，以王爲主。所任官司，皆是王臣。

訳文の一例：我が国に君主は2人いませんし、国民の側からしても2人の君主はいません [一君万民]。我が国には多くの国民がいますが、天皇が我が国の主人なのです。国司や国造といった中央から地方に派遣された公務員は天皇から任命を受けた身分なので、全員天皇の臣下なのです。

例 (6)、例 (7)、例 (8) に示されるように、「忠」の概念は「主君」の命令を実行することによって具体化されている。この実行は、ある倫理秩序の構造的な規定の下で行われるものである。しかし、前述した君臣関係における臣の義務は、その倫理秩序内の規定の一つに過ぎない。呉 (1994, p. 51) は、「忠」の内包を検討する上で、「十七条憲法」の特定の条文、すなわち例 (9) を研究することは不可欠だと考えている。

例 (9) 文章2 文4-2

原文：背私向公，是臣之道矣。

訳文の一例：私情を公務に持ちこまないことは、臣下として大切なことです。

これらの例文を総合すると、「忠」の概念には、主君の公共的な意志に対する従順も含まれていることが理解される。この従順は江戸時代に至るまで私の領域にまで及んでおり、最も顕著な表現は、朱 (2000, p. 194) が発見した現象である。彼は、林羅山をはじめとする日本の儒学者が「忠」と「孝」の間の衝突をどのように解決しようと試みたかを研究している。再び『勸進帳』を考慮すると、弁慶は自身の信念として、主君を守ることを誓う。これは、主君の意志を維持する主体である主君自身を守ることに本質的に関連している。

例 (10) では、著者がイベント全体に対する評価を提供している。

例 (10) 文章1 文25-1

虎の尾を踏み、毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥の国へぞ下りける。

例 (11) から明らかになるように、弁慶は『勸進帳』に描かれる「安宅」という特定の出来事だけでなく、主君が叙説に含めていた過去の出来事も、異なる場域やそれによって生じた異なる環境からの保護を提供していた。このように、弁慶の忠誠は特定の事件に限定されず、継続的な主君への献身として表現されている。

例 (11) 文章1 文5-1、5-2

¹ 『十七条憲法』において「主君」が特に天皇を指すことは、その憲法の効力と目的に由来する。古代日本の文化文脈において、「主君」という概念は、天皇に限定されるわけではなく、すべての君臣関係における君主を包含する可能性がある。

いかに弁慶、かく行く先々に関所あって、所詮陸奥(みちのく)までは思いもよらず。名もなきものの手にかからんよりはと、覚悟はかねて極めたれど、各々の言葉もだし難く、弁慶が詞に従い、かく強力(ごうりき)とは姿を変えたり。面々(めんめん)計ろう旨(はかろうむね)ありや。

例(11)において、弁慶は行動において倫理秩序の構造的な規定を貫徹し、同時に主君の亡命命令や安全な逃亡を実行する意志を柔軟かつ巧妙に実行し続けた。この実行は、金剛杖で主君を叩き、一見「忠」に反する行為に見えるように装いながら、守軍の防備を緩め、主君を守る目的を達成した。このような「経」と「権」の関係を解決する方法は、実践の結果を基準としている。² この基準は、荻生(1973, p. 224)が示す当時の日本の思想に沿っている。彼は武士の「忠」を、他人のために計画し、物事を処理する際に全身全霊を傾け、主君を補佐する「司寇の材」として機能することができると理解している。このように、弁慶の行動は、倫理的原則と現実の状況を織り交ぜ、忠誠と機智を併せ持った武士の精神を体現している。

武士道における「忠」の概念は、多面的な内包を持ち、主君の意志への忠誠、自己の実践、そして主君を効果的に補佐する能力を含む。これらの要素は、武士が自らの行動を通じて主君の意志を実現することが求められるという共通の論理に基づいており、その忠誠心の核心となる原則に従っている。この一貫性は、武士道の精神を支える基盤であり、その倫理的価値を形成する鍵である。

4. 「忠」の再解説：人物像から反映される武士道とその他のカテゴリーの意味

『勸進帳』において、弁慶のキャラクターは「忠」を直接的に表現するだけでなく、関連する様々なカテゴリーや概念も描写されている。これらのカテゴリーや概念は、直接は表現されていないが、「忠」に密接に結びついている間接的な要素も存在する。つまり、弁慶のキャラクターは「忠」という概念を、直接的な描写と間接的な示唆の両方で豊かにしている。

4.1 「道」、「徳」と「義」：「忠」の合法性及びその出所と形成過程

古代東アジアにおいて、言動の合理性は「名」(合法性)に基づいて確立され、その行動は合理性を持っていた。³ 言葉「武士道」は、「武士」と「道」という二つの要素から成り立っており、「道」は「徳」を通じて武士の行為の合法性を持つことができる。前述のように、「武士」は古代中国の「士大夫」の日本における変種と見做され、「徳目」(道徳的概念)としての「忠」は「名」の構築の源と経路を共有している。この「名」、特に「義」は、道徳主体に対して言動の合法性を与えている。この分析は、武士道における「忠」の概念が単なる忠誠心や服従を超え、更に深い合法性と道徳的正当性を持ち合わせていることを示唆している。この視点は、武士道の精神をより複雑で多面的な倫理的体系と理解し、武士の行為を単なる職業的規範から、より広範な道徳的原則に根差した行動と見なす能力を提供する。

「道」は、常に守られるべき根本的な倫理規則として捉えられるだけでなく、個人が「善」か「非善」かを判断する道徳的基準であり、「君子」と「小人」という二元対立関係を形成している。⁴ この倫理体系に基づき、「士大夫」の行動を規範づける「徳」という「大文字の他者」から派生した一連

² 「経」と「権」は、儒家思想に根ざした東アジア倫理学における基本概念である。「経」は儒家の基本原則と普遍的な道徳規範を指し、道徳行為の安定性と一致性を象徴する。一方、「権」は特定の状況下における「経」への柔軟な適用と融通を指し、道徳行為の適応性と状況性を表す。『勸進帳』におけるシーンは、「権変」を意図的に作り出し、表面的には道徳的衝突を生み出すが、実際には両者間に偽りの対立を作り出した。顔(2013)はこの「権変」を考察し、それによって「経」の普遍的価値が具体的な状況に応じて適応され、より強靱な生命力を持つようになるプロセスであると指摘する。この分析は、儒家の文脈において、高尚な倫理目的を追求する実践において、「経」と「権」の表面的な対立が解消され、その必要性和合理性が理解されることを意味している。

³ 中国の儒家経典『論語』の中で、特に『子路』篇に現れるこの思想は、「名不正則言不顺，言不顺則事不成」(「名」が正しくなければ言葉は適切ではなく、言葉が適切でなければ信じられず、従うことができず、物事が成功しない)という形で述べられている。これは、正確な「名」の重要性を強調しており、言葉と行動の適切性、そしてそれによって達成される成功の基礎を説明している(孔, 2018, p. 160)。この原則は、道徳的正当性と社会秩序の維持に不可欠な要素であると同時に示唆している。

⁴ 中国の儒家経典『中庸』は、「道」の根本性と永続的な性質を強調し、「道也者，不可須臾离也」(「道」は一瞬たりとも離れることができない)と述べている(曾 & 孔, 2019, p. 39)。一方、『大学』は「是故君子有大道，必忠信以得之，骄吝以失之」(訳文：そのため、君子は大きな「道」を持っており、「忠」と「信」をもってそれを獲得し、「驕」と「吝」をもってそれを失う)と表現し、道徳主体が「君子」であるかどうかを判断する唯一の基準として「道」を位置づけている(曾 & 孔, 2019, p. 31)。これらの経典は、道徳主体が「道」を守り、忠誠心と信用を通じてその道徳の高さを達成することが求められることを示している。

の道徳判断が、関係を判定する基盤を提供している。⁵『勸進帳』における弁慶の「忠」に対する理解も、この論理に沿っている。例えば、源義経のような臣下の失礼を容認する主君への忠誠は、『孟子』の『公孫丑』篇における「以德行仁者王」（訳文：徳と仁愛で国を治める者は、真の王者になるだろう）という「徳」に従い、「武士道」の精神に従っていると解釈される（孟, 2021, p. 49）。このように、「道」と「徳」は、武士道における「忠」の概念を形作る上で、密接に関連している。

「義」は、「道」を堅持することによって生じる正しい原則や洞察力を意味する。⁶例（12）において、弁慶は富樫に山伏がなぜ凶悪な相をしていたか尋ねられた際、自分の考えをはっきりと述べた。例（12）文章1 文11-1、11-2

かるが故に、内には慈悲の徳を納め、表には降魔（ごうま）の相を顕わし、悪鬼外道を威服（いふく）くせり。これ神仏の両部にして、百八の数珠に仏道の利益（りやく）を顕わす。

例（13）では、弁慶が「義」を刀の意味的解釈として捉えており、これは例（12）における彼の解釈と類似性がある。この類似性は、弁慶が「義」を武器や武力の象徴として理解していることを示唆しており、そのような理解は武士道の価値観と密接に関連している。

例（13）文章1 文12-1、12-2、12-3

これぞ案山子（かかり）の弓矢に似たれど、脅しに佩（は）くの料ならず。仏法王法に害をなす、悪獣毒蛇は言うに及ばず。たとわば人間なればとて、世を妨げ、仏法王法に敵する悪徒は、一殺（いっせつ）多生（たしょう）の理によって、ただちに斬って捨つるなり。

例（12）、例（13）およびそれ以外のある「義」の解釈は、弁慶が刀や兜巾、袈裟などの物品を象徴的に用いることで、どのように「道」を中心に「義」が形成され、その「義」を貫徹する過程で暴力が不可避免になるのかを示している。この暴力は、道徳体系に基づいて「小人」に対する非合法な行為として暴力のメカニズムを明らかにしている。一方で、日本の文学伝統における弁慶のキャラクターは「義」を象徴している。特に、平安時代後期に成立した『弁慶物語』では、弁慶が叙事的に改心した姿で描かれ、この行為は彼を「義」の象徴に変えている。この描写は、弁慶のキャラクターがどのように「義」を帯び、武士道の精神を体現するものとされるかを示している。

4.2 「勇」と「智」：「忠」の実践に必要な品質

「忠」は単なる道徳的な認識にとどまらず、道徳主体による実践を必要とする。その実践において、「勇」と「智」という品質は欠かせない。両者は互いに補完し、実践において不可欠な要素となっている。

「忠」の実践は「勇」を要求する。これは、「義」のために恐れることのない品質を指し、孔子の『論語』の『子罕』と『為政』篇で「勇者不惧」（訳文：勇敢な人は恐れない）（孔, 2018, p. 119）と「見义不为，无勇也」（訳文：「義」が必要なところで不作為は「勇」の欠如の表れ）（孔, 2018, p. 27）という異なる表現が見られる。例（14）は、緊張した状況を描写し、例（15）は弁慶

⁵ 『論語』の『里仁』篇において、「徳」を有するかどうかを「君子」と「小人」を区別する基準とされ、「君子怀徳」（訳文：君子は「徳」に関心を持つ）と述べられている（孔, 2018, p. 48）。また、『大戴礼記』の『哀公問五義』では、「徳」が様々な「徳目」に具体化されており、道徳的言動がこれらの「徳目」に一致するかどうかで、「君子」と「小人」を判断する。具体例として、『大戴礼記』は「士」（士大夫）がすべての知識や技能を習得することはできないが、必ず得意分野と精通した分野を持っていると記述している。完璧ではないが、守るべき原則と立場を有している。「知不务多，而务审其所知；行不务多，而务审其所由；言不务多，而务审其所谓」（訳文：知識を広く求めるのではなく、自分が学んだ知識を深く理解し、行為の多さではなくその合理性と正当性を求め、言葉の多さではなくその意味を熟考する。）ことが求められる。彼らが真に知識を理解し、正しい道を選び、適切な言葉を使えば、生命、体、皮膚のようにこれらの原則と立場を大切にし、富貴によって変わることもなく、貧賤によって諦めることもない。このような者が「士」（士大夫）と呼ばれる（戴, 2024）。このように、儒家の経典は「徳」を有することと、その「徳」が具体的な徳目にどのように表出されるかを強調し、それに基づいて道徳的主体性を判断する基準を設けている。

⁶ 『孟子』の『告子上』篇では、「道」における「義」を極めて高貴なものとし、生命そのものよりも価値が高い存在と位置づけている。この考え方は、「舍身而取义者也」（訳文：「義」を得るために命を捨てる覚悟を持つ者）という表現を通じて強調されており、これは「義」を得るためには命を差し出すことも惜しまないという、道徳的誠実さと勇気を示す（孟, 2021, p. 176）。

がその状況下でも守軍に恐怖を感じず、平然と質問に答えられる様子をナレーションしている。これらの例は、弁慶が「忠」を実践する際の「勇」を具体化している。

例 (14) 文章1 文9-1

富樫立上り、勸進帳を差覗く。

例 (15) 文章1 文13-1

まだこの外にも修験の道、疑いあらば、尋ねに応じて答え申さん。

「勇」は恐れや「義」への追求を超越し、自分の行為に対する慎重さを含む多面的な品質である。中国の古典『国語』の『越語上』では、「吾不欲匹夫之勇也、欲其旅进旅退」（訳文：私は無謀な人の「勇」を望まず、共に前進したり後退したりする判断力を持つことを望む）（左, 1935, p. 231）という考えが示されており、単なる勇敢さから一步を踏み出し、状況に応じた賢明な行動を選択する重要性が強調されている。例 (16) では、衝突中の弁慶が他の武士と対比されることで、「勇」の特性が顕在化している。弁慶は恐れを知らずに「義」を追求する一方で、自分の行動に慎重を期しており、状況を判断し適切な行動をとる能力を有している。この対比は、「勇」が無謀な勇みではなく、賢明な判断力と行動力を含むものであることを示唆している。

例 (16) 文章1 文17-1

此うち、弁慶、金剛杖を持って、双方を留める事よろしくあつて、キツと見得。

両方の武士の行為は、慎重さを欠いた「勇」であったと明らかである。特に源義経側の武士は、衝突が自分の隠されたアイデンティティを露見させる可能性があることを認識していなかった。その結果、主君を守るという本来の目的を達成できず、さらに大きな危険を招いた。一方、弁慶はこのリスクを認識しており、行動に慎重を期した。衝突が勃発した際には、衝突を緩和することで、自己の身分の暴露とそれに伴うリスクを最小限に抑えた。また、事件全体で採用されている「序—破—急」という叙事リズムは、弁慶の正確な行動を客観的に際立たせている。この点は、例 (17) で片岡氏が弁慶に対して下した評価にも反映されている。片岡氏は弁慶の行動を高く評価し、その慎重さと適切な判断力を認めている。

例 (17) 文章1 文20-1

これ全く、武蔵坊が智謀にあらずんば、免がれがたし。

「勇」は「智」という別の品質を指し、その中の一つの特徴は情勢の正確な判断力とその場に応じた柔軟な対応能力である。例 (18)、例 (19)、例 (20) は、弁慶が守軍の弛緩を発見し、その機会を利用して逃走を試みる様子を記述しており、これは彼の正確な情勢判断能力を示している。さらに、例 (21)、例 (22)、例 (23)、例 (24) は、弁慶が混乱の中で自らの山伏の身分を即席で作り上げ、その柔軟な対応を体現している。例 (21) では、富樫が勸進帳を調べ、弁慶の山伏身分の真偽を検証しようとする場面が描かれており、例 (22) では、弁慶が状況に応じて勸進帳を作り、自らの山伏身分を検証する試みを行っている。例 (23) では、弁慶が山伏らしい口ぶりを装って身分をさらに検証し、例 (24) では、この一串の出来事の結果として、富樫が弁慶らへの疑念を打ち消した結末が示されている。これらの描写は、弁慶が「勇」と「智」を併せ持ち、情勢を迅速かつ正確に判断し、それに応じた柔軟な対応を講じることで、危機を回避し、自己の身分を守るための策略を巧みに用いたことを明確にしている。

例 (18) 文章1 文15-1

いでいで、急ぎ申すべし。

例 (19) 文章1 文16-1

こは嬉しやと山伏も、しづしづ立って歩まれけり。

例 (20) 文章1 文24-1、24-2、24-3

大小片シャギリになり、弁慶、振りのうち、皆々に行けという思入れ。これにて義経先に、四人附いて向うへ入る。弁慶笈を背負い、金剛杖を持ち、富樫に辞儀して立上る。

例 (21) 文章1 文7-1、7-2

勸進帳を遊ばされ候へ。これにて聴聞(ちょうもん)つかまつらん。

例(22) 文章1 文8-1

元より勸進帳のあらばこそ、笈の内より往来の巻物一卷取り出だし、勸進帳と名附けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。

例(23) 文章1 文10-1、10-2、10-3、10-4、10-5、10-6、10-7

大恩今日主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の永き夢、驚かすべき人もなし。爰に中頃帝おはします。御名を聖武皇帝と申し奉る。最愛の夫人に別れ、恋慕の情やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫ね乾くいとまなし。故に上求菩提の為、盧遮那仏を建立し給う。然るに、去んじ寿永の頃焼亡し畢(おわ)んぬ。かかる霊場の絶えなん事を欺き、俊乗坊重源勅令の蒙って、無情の観門に涙を落とし、上下の真俗を勧めて、かの霊場を再建せんと諸国に勧進す。一紙半銭報賽の輩は現世にては無比の楽に誇り、当来にては数千蓮華の上に坐せん。帰命稽首(きみやうけいしゅ)、敬って白(まお)す。

例(24) 文章1 文14-1

ハハスく尊き客僧を、暫時も疑い申せしは、眼あつて無きが如き我が不念、今よりそれがし勧進の施主につかん。

「智」の特徴の一つは、主君のために深遠な思考をすることである。例(25)において、弁慶の発言は富樫の主君に対する疑いを完全に払拭し、その過程でいくつかの財物を獲得し、後に続く亡命生活の準備を整えた。この発言は、弁慶が主君の安全と利益を念頭に置いて周到に計画し、状況を有利に進展させる能力を示している。

例(25) 文章1 文18-1、18-2、18-3

まだこの上にも御疑いの候はば、この強力めを荷物の布施もろともにお預け申す。如何ようとも糺明あれ。但し、これにて打ち殺し申さんや。

例(25)は、周到な思考の重要性を強調しているにすぎない。さらに、例(26)では、著者が源義経の言葉を通じて、弁慶の思考過程を肯定し、その思考が主君の立場からのものであることを明確に示している。

例(26) 文章1 文19-1、19-2

如何に弁慶。今日の機転、所詮凡慮の及ぶ所にあらず。

4.3 個性と悲劇性：「忠」の道徳的価値のための闘争の性質

『勸進帳』において、弁慶は個性豊かなキャラクターとして描かれている。例(27)では、特に弁慶の登場部分に焦点を当てた描写が多く、その特別な扱いが物語全体に渡って顕著である。

例(27) 文章1 文4-1

後より武蔵坊弁慶、好みの拵え、数珠を持ち、文句一ぱいに出て、花道にとまる。コイヤイになり

『勸進帳』は弁慶を、悲劇的な色彩を帯びた人物として描いている。この点は、例(28)や例(29)の描写で特に顕著で、そのテキストには深い絶望感が漂う。これらの描写は、弁慶の内面世界と彼が直面する困難をより深く捉え、その悲劇的な運命を強調している。

例(28) 文章1 文22-1

山野海岸に、起き臥し明かす武士の

例(29) 文章1 文4-1、4-2、4-3

言語道断、かかる不祥(ぶしょう)のあるべきや。この上は力及ばず。さらば最後の勤めをなし、尋常に誅(ちゅう)せらりようずるにて候。方々近う渡り候へ。

『勸進帳』は、弁慶を個性的な悲劇的なキャラクターとして描く一方で、彼の中に潜在する英雄的な気質も浮き彫りにする。この英雄気質は「バイロン式の英雄」と呼ばれるもので、個性を持ち、自己の意志のために強い相手と戦い、必然の失敗に直面しても屈服しないという性質を指す。古代ギリシャの悲劇は、基本的にこのような英雄像の形成を中心に物語が展開されている。『勸進帳』において弁慶は、「忠」の信仰に従い、源義経を捕らえ、鎌倉幕府に対抗する決断を惜しまない。彼は失敗を知

りつつも、主君への忠誠を選び続ける。この闘争の中で、「忠」は闘争的概念と化し、弁慶の個性はその闘争性をより劇的に映し出す。さらに、弁慶の主体性は自由意志を持ち、「忠」を「善良な意志と責任」(Kant, 1977, p. 397)の本質と結びつけることで、衛道士としてのイメージを形成している。このように、「忠」は道徳的価値を守る闘争性を持つだけでなく、主体に英雄的な気質を与えている。この点から、「忠」は道徳を守るための闘争であり、弁慶はその闘士としての姿を鮮明にしている。

5. まとめ

本研究は、『勸進帳』における弁慶のキャラクターを多角的な文化批評の手法で分析し、武士道における「忠」の概念を再解釈することを目的とする。この分析は、文化的なテクニクの深層の意味を探究し、歴史的背景と学際的な視点を組み合わせて、弁慶のキャラクターが象徴する「忠」の多面性を明らかにする。本研究は、「忠」の概念を再解釈し、以下の観点に従って分析を展開した。

- 1) 「忠」は、主君に対する深い「情」に基礎を置いており、これは忠誠心の根本的な原動力となる。
- 2) 「忠」の核心は、主君の意志に対する忠実な実践であり、その忠誠を行動に表すことを求める。
- 3) 「忠」は合法性を持つ道徳概念で、「義」を通じて正当性を得、「徳」を仲介にして行為を「道」に一致させたものとされる。
- 4) 武士が「忠」を実践するには、「勇」と「智」という2つの品質が不可欠で、これらの品質は忠誠の実践を支える。
- 5) 「忠」は道徳的価値を擁護するための闘争性を持っており、主体に英雄的な気質を与え、その行為を道徳的なものと昇華させる。

これらの文章の各部における検討と結論を総合的に考えるに、「忠」は、主君との「情」に基づく主君の意志に対する実践として再解釈されるべき概念である。その実践は、単なる服従ではなく、合法性と道徳的価値を支持する闘争的な性質を有している。また、武士が「忠」を実行するためには、「勇」と「智」という2つの品質を備える必要があり、これらは忠誠心の具体化と成就を確実に導く不可欠な要素である。

この研究の結果により、「武士道」における「忠」の概念を再評価し、より包括的かつ繊細な理解に達することができた。その再評価の過程で、以下のポイントが顕在化した：1) 「忠」は、純粋な道徳的義務ではなく、主君との深い感情に基づくものである。2) 「忠」の内包は、主君の意志に対する実践であり、これは武士が自己の個性を喪失する必要があることを意味するものではない。3) 「忠」における「義」は、「道徳—合法的言動」の生成経路をたどるため、「忠」は道徳的価値を守る闘争性を有している。4) 「忠」の実践には、「勇」と「智」という2つの品質が必要不可欠であり、これは「武士道」が「忠」を中心に単一の概念ではなく、「道」を中心とした多様な観念とそれらの相互作用の体系であることを示唆している。これらの「忠」の再理解と再解釈は、日本の歴史と文化、特に明治以前の関連研究、およびその多くのサブドメインの研究に応用されるべきであると提案する。この分析は、日本の文化と歴史における「忠」の多面性と複雑さをより深く理解する鍵を提供する。また、この研究成果は、武士道における「忠」に、現代社会においても受け継がれる価値があることを示唆している。例えば個人の職業倫理として、仕事への愛情、責任感を、仕事の質として、個人の職業成長と企業の発展を推進する。

謝辞

ここでは、朱さんおよび森さんに対して、私の文章の言語表現、特に文法のチェックに協力してくださったことに感謝の意を表します。また、義経伝説に関する研究を行っている佐藤氏にも深く感謝しています。彼が立ち上げた「義経デジタル文庫」ウェブサイトは、私の研究に必要な貴重な資料を提供してくだただけでなく、『勸進帳』における弁慶のキャラクターを通じた「忠」の再解釈に関する私の構想を確立する上で多大な役割を果たしてくれました。

References

- Ansart, O. (2007). Loyalty in seventeenth and eighteenth century Samurai discourse. *Japanese Studies*, 27(2), 139-154. <https://doi.org/10.1080/10371390701494150>
- Braunstein, F. (2005). *Age des héros, âge des guerriers : Géographie sacrée et corporelle du guerrier japonais avant l'ère Meiji*. L'Harmattan.
- Buchanan, D. C. (1965). *Japanese proverbs and sayings*. University of Oklahoma Press.
- Coldren, D. A. (2013). Literature of Bushidō: Loyalty, honorable death, and the evolution of the Samurai ideal. *International ResearchScape Journal*, 1, 1-29. <https://doi.org/10.25035/irj.01.01.02>
- Hurst, G. C. (1990). Death, honor, and loyalty [sic]: The Bushidō ideal. *Philosophy East and West*, 40(4), 511-527. <https://doi.org/10.2307/1399355>
- Kant, I. (1977). *Werke in zwölf Bänden*. Band 8. Suhrkamp.
- Nitobe, I. (2012). *Bushido: The soul of Japan*. Kodansha International.
- Tsunetomo, Y. (1981). *Hagakure: The book of the Samurai* (W. S. Wilson, Trans.). Avon Books. (Original work published 1981).
- Sharf, R. H. (1995). The Zen of Japanese nationalism. In D. Lopez (Ed.), *Curators of the Buddha: The study of buddhism under colonialism* (pp. 1-43). University of Chicago Press.
- Virginia, S. (1998). *Japan in the days of the Samurai (cultures of the past)*. Benchmark Books.
- Игоревна, К.А. (2020). Герой, наделенный легендарными родителями: формирование образа Мусасибō Бэнкэй в "Сказании о Ёсицунэ". *Сибирский филологический журнал*, 19(1), 58-71.
- 戴 德 (2024, April 8). 《大戴礼记》·哀公问五义第四十. 汉程网. <https://guoxue.httpe.cn/html/book/ILMEILXV/CQAZPWMECQRN.shtml>
- 戴 季陶. (2011). 日本论. 光明日报出版社.
- 付 林鹏. (2008). 从《武士道》看武士道精神价值的核心. *黑龙江史志*, 24(12), 31-32.
- 蒋 四芳. (2010). 中江藤树的士道观：《翁问答》. *安徽文学*, 34(3), 237-238.
- 孔 丘. (2018). 论语. 岳麓书社.
- 孟 柯. (2021). 孟子. 岳麓书社.
- 吴 廷璆. (1994). 日本史. 南开大学出版社.
- 颜 玮媛. (2013). 儒家经权思想的伦理研究 (硕士论文). 湖南师范大学.
- 朱 谦之. (2000). 日本的朱子学. 人民出版社.
- 左 丘明. (1935). 国语. 商务印书馆.
- 左 丘明. (2006). 左传. 岳麓书社.
- 曾 参 & 孔 汲. (2019). 大学 中庸. 河南人民出版社.
- 藤原 成一. (2000). 武蔵坊弁慶—日本人の心性史の試み. *日本大学芸術学部紀要*, 25(32), 39-55.

- 藤原 成一. (2001). 武蔵坊弁慶—日本人の心性史の試み(2). 日本大学芸術学部紀要, 26(34), 15-29.
- 加代 昌広. (2023, January 28). 聖徳太子の「十七条の憲法」の現代語訳をしてみた 日本まほろば社会科研究室. <https://shakai-chireki-koumin.net/mahoroba-17articles-written-by-shotoku-taishi/>
- 黒板 勝美. (1914). 義経伝. 創元社.
- 前川 佳代 (2004, November 12). 源義経年表 義経デジタル文庫.
http://www.st.rim.or.jp/~success/Chronology_Y01.htm
- 丸山 眞男. (1992). 忠誠と反逆：転形期日本の精神史的位相. 築摩書房.
- 三浦 周行 (2000, September 1). 源義経 義経デジタル文庫.
http://www.st.rim.or.jp/~success/miura_yositune.htm
- 並木 五瓶 (2001, December 16). 歌舞伎十八番 勧進帳. 義経デジタル文庫.
http://www.st.rim.or.jp/~success/kanjincho_yositune.html
- 並木 五瓶. (2023, February 7). 歌舞伎十八番の内 勧進帳 (かんじんちょう). 歌舞伎のセリフ.
https://www.kabuki.opiroblog.com/kabuki_kanjincho/
- 荻生 徂徠. (1973). 弁名. 荻生徂徠 / 吉川幸次郎. 日本思想大系 36 荻 生徂徠. 岩波書店.
- 島津 久基. (1933). 岩波講座日本文学「義経記」. 岩波書店.
- 島津 久基. (2001a, November 29). 全集団としての義経伝説. 義経伝説と文学. 義経デジタル文庫.
http://www.st.rim.or.jp/~success/simazu_h08.html
- 島津 久基. (2001b, November 29). 義経伝説の凝成としての義経文学——判官物の典型作『安宅』と『勧進帳』. 義経伝説と文学. 義経デジタル文庫.
http://www.st.rim.or.jp/~success/simazu_3h05.html#1
- 鳥谷 芳雄. (2022). 静嘉堂文庫「武蔵坊弁慶由来」について：翻刻と特色、そして今日的「伝説」の検討. 山陰民俗研究, 27, 59-70.

別添資料：この記事に引用されている『勸進帳』と日本古典の原文（括弧内の数字は段落とその段落の文番号を表す。）

文章① 勸進帳

（文1-1）さても頼朝義経御仲（おんなか）不和とならせ給うにより、判官どの主従（しゅうじゅう）、作り山伏となり、陸奥（みちのく）へ御下向あるより、鎌倉殿聞こし召し及ばれ、かく国々に新関（しんせき）を立て、山伏を詮議せよとの厳命により、それがし、この関を相守る。（並木，2023）

（文2-1）仰せの如く、この程も怪しげなる山伏を捕え、梟木（きょうぼく）に掛け並べ置きましてござりまする。（並木，2023）

（文3-1）旅の衣は篠懸（すずかけ）の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしおるらん。

（文3-2）時しも頃は如月の、如月の十日の夜、月の都を立ち出でて、

（文3-3）これやこの行くも帰るも別れては、知るも知らぬも、逢坂（おうさか）の山隠す霞ぞ春はゆかしける、波路はるかに行く船の、海津の浦に着きにけり。（並木，2023）

（文4-1）後より武蔵坊弁慶、好みの拵え、数珠を持ち、文句一ぱいに出て、花道にとまる。コイヤイになり”（並木，2001）

（文5-1）いかに弁慶、かく行く先々に関所あって、所詮陸奥（みちのく）までは思いもよらず。名もなきものの手にかからんよりはと、覚悟はかねて極めたれど、各々の言葉もだし難く、弁慶が詞に従い、かく強力（ごうりき）とは姿を変えたり。（文5-2）面々（めんめん）計ろう旨（はかろうむね）ありや。（並木，2023）

（文6-1）言語道断、かかる不祥（ぶしょう）のあるべきや。この上は力及ばず。（文6-2）さらば最後の勤めをなし、尋常に誅（ちゅう）せらりようずるにて候。（文6-3）方々近う渡り候へ。（並木，2023）

（文7-1）勸進帳を遊ばされ候へ。（文7-2）これにて聴聞（ちょうもん）つかまつらん。（並木，2023）

（文8-1）元より勸進帳のあらばこそ、笈の内より往来の巻物一巻取り出だし、勸進帳と名付けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。（並木，2001）

（文9-1）富樫立上り、勸進帳を差覗く。（並木，2023）

（文10-1）大恩今日主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の永き夢、驚かすべき人もなし。（文10-2）爰に中頃帝おはします。御名を聖武皇帝と申し奉る。（文10-3）最愛の夫人に別れ、恋慕の情やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫ね乾くいとまなし。（文10-4）故に上求菩提の為、盧遮那仏を建立し給う。然るに、去んじ寿永の頃焼亡し畢（おわ）んぬ。（文10-5）かかる霊場の絶えなん事を欺き、俊乗坊重源勅令の蒙って、無情の観門に涙を落とし、上下の真俗を勧めて、かの霊場を再建せんと諸国に勧進す。（文10-6）一紙半銭報賽の輩は現世にては無比の楽に誇り、当来にては数千蓮華の上に坐せん。（文10-6）帰命稽首（きみやうけいしゅ）、敬って白（まお）す。

（文11-1）かるが故に、内には慈悲の徳を納め、表には降魔（ごうま）の相を顕わし、悪鬼外道を威服（いふく）くせり。（文10-2）これ神仏の両部にして、百八の数珠に仏道の利益（りやく）を顕わす。（並木，2023）

（文12-1）これぞ案山子（かかり）の弓矢に似たれど、脅しに佩（は）くの料ならず。（文12-2）仏法王法に害をなす、悪獸毒蛇は言うに及ばず。（文12-3）たとわば人間なればとて、世を妨げ、仏法王法に敵する悪徒は、一殺（いっせつ）多生（たしょう）の理によって、ただちに斬って捨つるなり。（並木，2023）

（文13-1）まだこの外にも修験の道、疑いあらば、尋ねに応じて答え申さん。（並木，2023）

（文14-1）ハハ斯く尊き客僧を、暫時も疑い申せしは、眼あって無きが如き我が不念、今よりそれがし勸進の施主につかん。（並木，2023）

（文15-1）いでいで、急ぎ申すべし。（並木，2023）

（文16-1）こは嬉しやと山伏も、しづしづ立って歩まれけり。（並木，2001）

（文17-1）此うち、弁慶、金剛杖を持って、双方を留める事よろしくあって、キッと見得。（並木，2001）

（文18-1）まだこの上にも御疑いの候はば、この強力めを荷物の布施もろともにお預け申す。（文17-2）如何ようともし明あれ。（文17-3）但し、これにて打ち殺し申さんや。（並木，2001）

（文19-1）如何に弁慶。（文18-2）今日の機転、所詮凡慮の及ぶ所にあらず。（並木，2023）

（文20-1）これ全く、武蔵坊が智謀にあらずんば、免がれがたし。（並木，2023）

(文21-1) 弁慶 それ、世は末世に及ぶといえども、日月いまだ地に落ち給わず。御高運、ハハ有難し有難し。計略とは申しながら、正しき主君を打擲、天罰そら恐ろしく、千鈞をも上ぐるそれがし、腕も痺るる如く覚え候。アラ、勿体なや勿体なや。

(文21-2) 地 ついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。

(文21-3) 地 判官御手を取り給い。

(文21-4) ト 皆々愁いの思入れ、(並木, 2001)

(文22-1) 山野海岸に、起き臥し明かす武士の。(並木, 2023)

(文23-1) 地 実に実にこれも心得たり人の情の杯を受けて心をとどむとかや。

(文23-2) ト 杯を受け、よろしくあって

(文23-3) 地 今は昔の語り草、

(文23-4) 地 あら恥ずかしの我が心、一度まみえし女さえ、

(文23-5) 地 迷いの道の関越えて今また爰に越えかぬる、

(文23-6) 地 人目の関のやるせなや、

(文23-7) 地 アア悟られぬこそ浮世なれ。(並木, 2023)

(文24-1) 大小片シャギリになり、弁慶、振りのうち、皆々に行けという思入れ。(文24-2) これにて義経先に、四人附いて向うへ入る。(文24-3) 弁慶笈を背負い、金剛杖を持ち、富樫に辞儀して立上る。(並木, 2001)

(文25-1) 虎の尾を踏み、毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥の国へぞ下りける。(並木, 2023)

文章② 十七条憲法 (加代, 2023)

(文1-1) 三曰：(文1-2) 承詔必謹。(文1-3) 君則天之，臣則地之。(文1-4) 天覆臣載，四時順行，萬氣得通。(文1-5) 地欲覆天，則至壞耳。(文1-6) 是以君言臣承，上行下靡。(文1-7) 故承詔必慎，不謹自敗。

(文2-1) 六曰：(文2-2) 懲惡勸善，古之良典。(文2-3) 是以无匿人善，見惡必匡。(文2-4) 其諂詐者，則爲覆二國家之利器，爲絶人民之鋒劒。(文2-5) 亦佞媚者，對上則好説下過，逢下則誹謗上失。

(文2-6) 其如此人，皆无忠於君，无仁於民，是大亂之本也。

(文3-1) 十二曰：(文3-2) 國司國造，勿斂百姓。(文3-3) 國非二君，民無兩主。(文3-4) 率土兆民，以王爲主。(文3-5) 所任官司，皆是王臣。(文3-6) 何敢與公賦斂百姓。

(文4-1) 十五曰：(文4-2) 背私向公，是臣之道矣。(文4-3) 凡人有私必有恨，有憾必非同，非同則以私妨公，憾起則違制害法。(文4-4) 故初章云：上下和諧，其亦是情歟？